●優秀賞

21世紀型能力につながる汎用的な資質・能力を育成する音楽科学習

～「真正のパフォーマンス評価」を取り入れて～

岐阜県教育委員会美濃教育事務所
（前岐阜市立東長良中学校）
薄田茂樹（うすだしげき）

〈概要〉

グローバル社会に対応する教育を求めていくために、平成24年度、国立教育政策研究所は、「教育課程の編成に関する基礎的研究」のプロジェクト研究の報告書において、「21世紀型能力」を発表した[1]。21世紀型能力とは、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」、その使い方を方向付ける「実践力」という三層構造で構成されている。これは、教科等横断的に育てたい汎用的な資質・能力に他ならない。また、アジア諸国においては、音楽科が単独で存在するのは日本を含め、マレーシアなどわずかとなり、教科の統合が急速に進んでいる[2]。こうした現状の中、学校音楽教育の意義を見いだしていく必要がある。

このように、学校で学んだ知識や技能の定型的な適用ではなく、問題に直面した時点で集められる情報や知識を入手し、それらを統合して新しい答えを創り出す力など、「知っていること」だけでなく「できること」、すなわち、資質・能力を求めていることが分かる。

そこで、音楽科においても真正評価論に基づくパフォーマンス評価を取り入れ、各教科等で身に付けた力を総合的に活用しながら、21世紀型能力が目指す資質・能力の育成に寄与する新たな音楽科授業モデルの提案について述べる。

〈キーワード〉真正のパフォーマンス評価、真正のパフォーマンス課題、ルーブリック、実演・動画のルーブリック

1　学校音楽教育の課題点

日本における旧来の学校音楽教育の授業スタイルは、教師主導による教師の音楽性を児童生徒に伝達し表現させる活動に重点をおいたものが多かった。また、「校内合唱コンクール」に代表されるように、技術的に高度な演奏技術を求める傾向にあった。感性を育むための思考・判断・表現の一連のプロセスが十分ではなく、「確かな学力」に位置付いている「思考力・判断力・表現力等」を育成するという視点がやや弱かったと言える。また、OECDが求めている「知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」[3]であるキー・コンピテンシーに代表される「活用する力」を育成するという視点は十分ではない。

先述したように、今後求められる21世紀型能力を基盤とした資質・能力に着目した学校音楽教育の在り方を模索していくことこそ、音楽科の存在意義を見いだすことができるのではないかと考えた。そこで、真正のパフォーマンス評価に着目して実践を進めることにした。

2　音楽科における「真正のパフォーマンス評価」

従来、音楽科では表現活動などパフォーマンスを中心とした評価を実践してきた。しかし、真正の評価論に基づくパフォーマンス評価とは違う。小山英恵の見解をもとに音楽科における「真正のパフォーマンス評価」についてまとめることにする。

表１のように、①からは、単に楽曲を表現したり鑑賞したりすることとは異なり、リアルな生活場面を想定した課題を基に、従前に身に付けた力を総合的に活用し、思考・判断・表現の一連のプロセスを辿りながら、質の高い学力の育成が期待できる。また、パフォーマンスを中心とする音楽科においては、評価の在り方について多くの課題を抱えている。時間的芸術であるために、形として残りにくく曖昧になることが多い。②からは､評価規準･基準を示したルーブリックを用いることで、形成的評価が可能となり、子どもたちとともに目指すゴールを明らかにしながら学習を展開することができる。創造性が含まれる音楽科の場合、教師が子どもたちのゴールをすべて描き切ることは難しい。よって、子どもたちとともにルーブリックの改善を図りながら、目指すゴールを明確にしながら学習を進める実践をしたいと考えた。

3　研究の過程

真正のパフォーマンス評価を音楽科に導入するに当たって、鑑賞領域から実践を試みることにした。従来の鑑賞領域の授業といえば、鑑賞曲を聴いて、ワークシート等に聴き取ったことをまとめ、聴き取った内容を発表するというものである。表現領域に比べ、年間の指導に占める割合も少なく、子どもたちの主体的な学びが生み出しにくい授業展開が行われることが多かった。鑑賞領域は、言語活動を手立てとして楽曲を批評することになる。各教科において言語活動の充実が求められているが、鑑賞領域の学習は、この言語活動の充実を図る上で大きな可能性を秘めていると考える。さらに、真正のパフォーマンス評価を導入することで、子どもたちの能動的な姿が生まれ、仲間とコミュニケーションを図りながら主体的な学習が展開できると考えた。

その後、表現領域への拡充、各学年への展開という流れで実践を進めた。表現領域においては、教育芸術社の教科書（２・３年下）には混声四部合唱で示されている「自由への讃歌」を取り上げ、ジャズ特有の即興演奏を取り入れ実践を進めた（**表２**）。

表１　真正のパフォーマンス評価についてのポイント[4]

① 「真正の課題」としてのパフォーマンス課題によって評価することである。このパフォーマンス課題とは、「大人が仕事場や市民生活の場、個人的な生活の場で『試されている』文脈を模写」するなかで評価する課題を意味する。このような課題では、子どもたちに、「真正性」のある文脈、すなわち新たな状況や様々な制限のある現実世界における文脈において、それまでに学習した知識・技能を総合し活用することによって、質の高い学力のパフォーマンスを示すことが求められる。また、課題は現実的で挑戦的なものであるために子どもにとって魅力的なものとなる。

② フィードバックにより子どもたちが自らのパフォーマンスを自己評価・自己調整する機会を設定することによって、形成的評価と自己評価の結合を実現することである。常にその時点でのパフォーマンスの到達度を把握し、評価規準・基準の指標であるルーブリックに照らしながらゴールに向けてパフォーマンスを修正・改善・洗練する継続的な評価システムこそ、子どもにおける学習対象の深い理解につながるとされる。

表２　音楽科における真正のパフォーマンス評価を導入した実践の経過

実践期間	学年	題材名（単元名）・教材曲
平成24年 10月～11月	３年生 鑑賞	【題材名】「名曲をプレゼンテーションしよう」 チャイコフスキー作曲バレエ音楽「くるみ割り人形」からトレパック（ロシアの踊り）
平成25年 ６月～７月	３年生 表現	【題材名】「リズムを自由に変えてジャズで即興演奏を楽しもう！」 オスカー・ピーターソン作曲「自由への讃歌」

４　鑑賞領域におけるパフォーマンス評価の実践

今回の実践では、「逆向き設計」論[5]に基づき、単元（題材）指導計画を作成した。鑑賞の学習では、音楽の諸要素（〔共通事項〕）に着目し、楽曲を分析的に捉え、言語による批評を通して可視化する方法がとられることが多い。しかし、言語による可視化は、自身の音楽意識を転換することはできても、どのように捉えたかをリアルに相手に伝えることに限界がある。そこで、図形楽譜（**図１・２**）を取り入れ、言語的な説明と組み合わせて批評するようにした。次の**表３**、**４**のように単元（題材）指導計画及びルー

表３　「逆向き設計」論により作成した単元（題材）指導計画

単元（題材）指導計画　「名曲をプレゼンテーションしよう」
［題材のねらい］
・楽曲の雰囲気や特徴を交流し合う活動を通して、音楽の特徴や構成を理解することができる。
・総合芸術に親しみ、音色、速度、旋律、強弱などを生み出す音楽の特徴を物語の展開と関連付けてパフォーマンスを通して、楽曲を批評することができる。

［パフォーマンス課題］
国際会議場大ホールにて、チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」のバレエ公演が開催されることになりました。公園主催者は、多くの人々で満席にできるようなコマーシャルを作ってほしいということです。コマーシャル中は、「トレパック」の演奏が流れています。「トレパック」の特徴を生かしたコマーシャルにしてほしいとのことです。今まで学習したことを生かし、この曲の音楽的特徴をパフォーマンスで創作し、上演することを求めています。地元ケーブルテレビ局があなたたちのパフォーマンスを撮影します。また、撮影の前にリハーサルの時間が確保されています。

（第４時）パフォーマンス課題による授業展開
パフォーマンス課題に基づく各グループが作成したプレゼンテーションの発表を通して、楽曲の雰囲気や特徴を音楽の諸要素と結び付けて、自分なりの価値を考えたり、解釈したりして批評することができる。

（第３時）プレゼンテーションのリハーサルと修正
創作したパフォーマンスによるプレゼンテーションのリハーサルを通して、楽曲の音楽的特徴をよりリアルに表現するために修正を加えながら、グループのパフォーマンスを完成することができる。

（第２時）楽曲の特徴を生かしたパフォーマンスの創作
パフォーマンス課題に基づく楽曲の特徴を生かしたパフォーマンスをグループごとに創作することができる。

（第１時）図形楽譜による楽曲の特徴の可視化
パフォーマンス課題によるパフォーマンス作りのベースとなるように、様々な図形や色を組み合わせ、楽曲の音楽的特徴を可視化し、図形楽譜による楽曲の批評ができる。

表４　「名曲をプレゼンテーションしよう」ルーブリック[6]

A	◆次の４つの音楽的な要素を満たした、生徒が作成した動画による作品を鑑賞し、生徒とルーブリックの共有をする。 次の①～④までの課題について、４つの課題のうち３つ以上の課題を満たしている。 ①強弱：楽曲が進行するに当たって、徐々にクレシェンドし、最後は華やかにffで終止する特徴を表現している。 ②速度：楽曲が進行するに当たって、アッチェレランドし、速度が速くなる特徴を表現している。 ③音色：登場する各楽器の音色、オーケストラの多彩な音色を表現している。 ④リズム：コミカルで軽快な主題のリズムをもつコサック踊りの特徴を表現している。
B	上に示された４つの課題のうち、２つの課題を満たしている。
C	上に示された４つの課題のうち、１つの課題を満たしている。

ブリックを立案した。

⑴　パフォーマンスにつながる図形楽譜を取り入れた批評

音楽科の鑑賞領域では、生徒が批評を行う際、可視化するための方略として批評文や紹介文を書かせて取り組まれることが多かった。しかし、言語での批評により、子どもの内面に広がったイメージや感受を外部に表現することは、限定的となる。図形楽譜は、色紙を使用し、「かたち」「色」「動き」「大きさ」「量」のファクターによって音楽の特徴を表現する方法である。作成した図形楽譜を用いて、言語による説明を加えることで聴き手には楽曲の批評が理解しやすくなる。実際に生徒は、グループでのコミュニケーション活動を通し、「トレパック」の音楽的特徴について、アイデアを凝らした図形楽譜を作成した。言語と自らが作成した図形楽譜との組み合わせた批評（表現）が、パフォーマンスの創造に効果を発揮するものとなった。

⑵　動画を取り入れたルーブリックの提示

今回開発した単元「名曲をプレゼンテーションしよう」のパフォーマンス課題において、ルーブリックは**表４**のように３段階で定めた。言語によるルーブリックの限界を打開し、生徒と教師が最終的に目指す姿を具体的に描くために動画によるルーブリックを示し、共有することにした。実演・動画のルーブリックとして示したものは、生徒がグラフィック・ソフトで制作した動画である。楽曲の音源ファイルとグラフィックを連動させ、曲の演奏に合わせて様々な図形が登場し、自由自在に動きを変えていくように作成している。この生徒は、静止画像と

図１　生徒が作成した図形楽譜

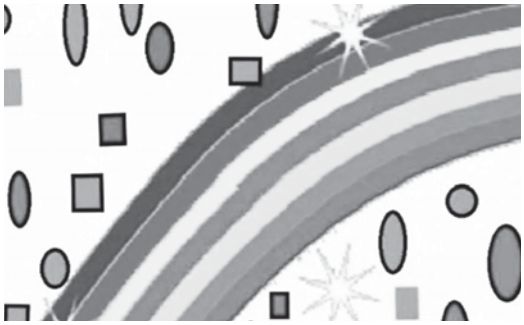


図２　生徒が動画で表現した作品

しての図形楽譜を用いて楽曲を批評した学びを活用し、動画グラフィックによる楽曲の批評を試みたのである。動画のほうが静止画像よりも、豊かに表出できる音楽的な要素もあり、静止画像から動画グラフィックへの表現方法の変化だけでなく、ここには表現内容の高まりも認めることができる。

⑶　多様なパフォーマンスによる批評

図形楽譜と批評文による楽曲の鑑賞を通し、楽曲の特徴を理解した上で、パフォーマンス課題に取り組むこととした。生徒の創造力が刺激され、各グループのパフォーマンスが多彩になった。この多彩さが学びを深める機会となった理由として、音楽の授業で身に付けた知識・技能等だけでなく、「演劇を学んでいる生徒」、「楽器を学んでいる生徒」、「バレエを学んでいる生徒」、「パソコンに興味をもち自分で高めてきた生徒」、「絵画が得意な生徒」、「語りが得意な生徒」など、生徒が従前において身に付けてきた様々な力を総合的に発揮して、楽曲の特徴を表現していることが分かる（**表５**）。

表６は、授業を終えた後に生徒がワークシートに記入した批評文である。この生徒のケースでは、従来行ってきた鑑賞領域の文章による批評を超える価値に気付いている。操り人形を動かして表現したパフォーマンスが滑稽に映り、この滑稽さが農民の踊りであるコサックダンスを想起する効果をもたらした。打楽器のタンバリンは、「トレパック」の主題に取り上げられているテーマのリズムを強調する役目となり、この楽曲の反復されるリズムの効果を引き出すことにつながっている。また、実際のバレエの踊りが挿入されることにより、今回のルーブリック作成の視点である「強弱」「速度」「音色」「リズム」という音楽的な要素が、バレエの動き一つ一つと関連付けて表現されていることへの理解を深めることにつながっていた。音楽的

表５　各グループのパフォーマンスの内容

A　図形楽譜（色、形）、人形劇、楽器による演奏（サックス、ヴァイオリン）を取り入れたパフォーマンス	D　テレビショッピングの形態を取り入れたピクチャーストーリーを用いたパフォーマンス
B　ピエロを主人公にした人形劇と遊園地に打ち上げられた花火をイメージした図形楽譜によるパフォーマンス	E　プレゼンテーションソフトを使用したスライドショーによるパフォーマンス
C　操り人形（マリオネット）と実際のバレエの踊り、楽器演奏を組み合わせたパフォーマンス	F　実際の楽器による演奏を取り入れたパフォーマンス

表６　授業後にワークシートに記述した生徒Ｂの批評文

トレパックは、その音色、速度、強弱、リズムの反復全てが愉快で華やかな、思わず手拍子をとって踊ってしまいそうな、頭に残る曲想を表現しています。すべての音楽的要素をこの曲想に表現するために総動員しているような印象です。（略）Ｃ班は、人形、タンバリン、ダンスの３つを使ってプレゼンを行いました。操り人形で表現した人形の動きは、さまざまな動きをすることで曲の感じと合っていました。「くるみ割り人形」のコサックダンスを彷彿とさせました。「トレパック」は別名「コサックの踊り」だったと思います。そのこっけいな踊りとよく合っていました。タンバリンは特徴的な耳に残るリズムを表現していました。ダンスは、一緒に跳んだり、ステップを踏んだりその一つ一つの動作を音楽と合わせることで、音楽の「音色」「速度」「リズム」という要素を表現し、激しさからは「強弱」を表現しているように感じました。（略）Ａさんの言ったように「学び」を「プレゼン」という形で表現することで、文章以上に相手に伝わり、また自分の理解も深まりました。（波線：筆者）

な要素の可視化をねらい多様な表現方法を組み合わせたことにより、「トレパック」の特徴が実感を伴って鑑賞できているという手応えを掴むことができた。

生徒の批評文には、「トレパック」の鑑賞の学習を様々な表現の媒体を用い、総合的に表現したことにより、文章で批評するよりもさらに実感を伴って理解できたと述べられている。パフォーマンス課題に取り組んだ学習が、この生徒にとって「永続的理解」への一助となったことを示唆している。

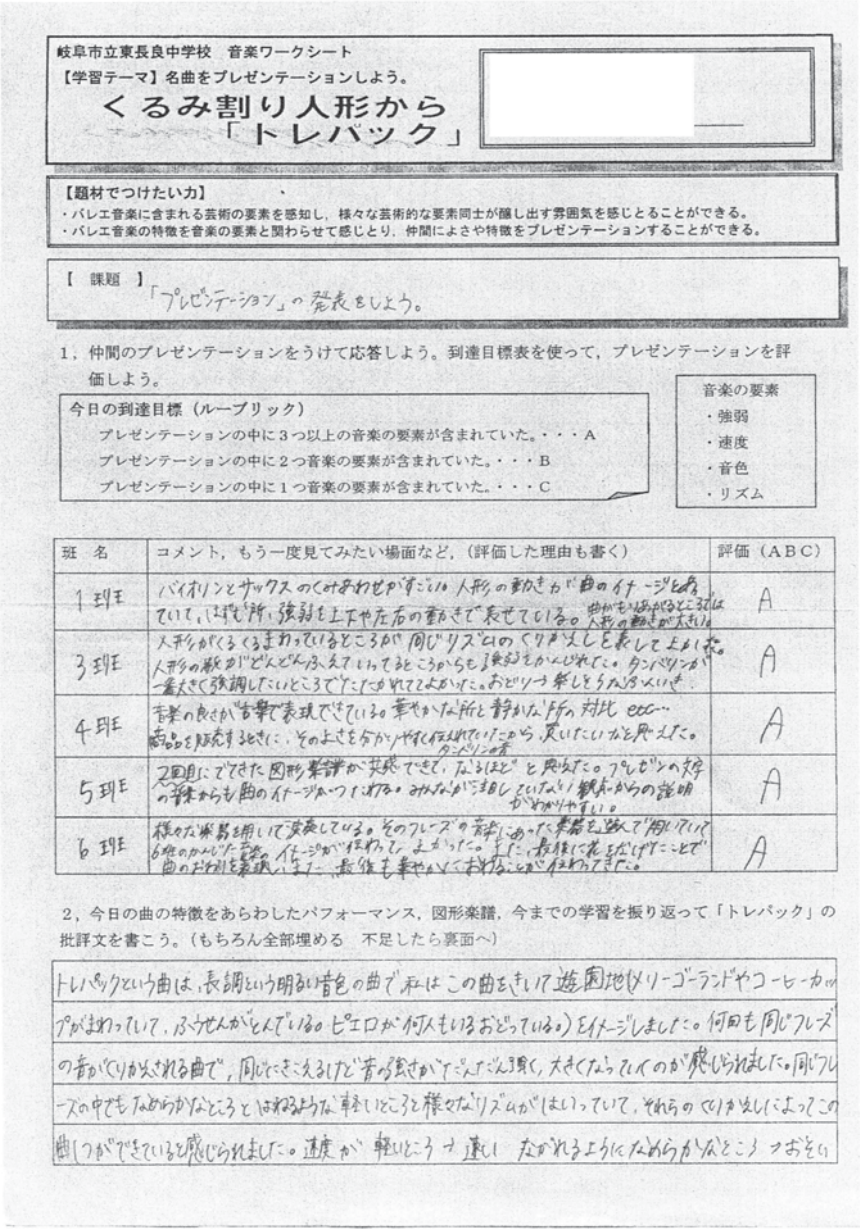
生徒たちとルーブリックを共有すると、生徒の自己評価力を育成し自己認識力を高めることができる。例えば、ワークシートを活用し、生徒から生徒へのフィードバックや相互評価として実施することも可能である。生徒にとっても、鑑賞者である他班の生徒の評価記述の内容は、最終的な批評文としてまとめる際の参考にもなる。こうした評価の教育機能を組織することにより、メタ認知の育成のみならず、生徒が自己の高まりを客観的に捉え、成長の手応えを掴みながら高次の学力形成につながっていくことが明らかになってきた。

図3　生徒のパフォーマンスの様子

5　表現領域におけるパフォーマンス評価の実践

鑑賞領域において、パフォーマンスを取り入れたことによって質的な高まりが見られた。音楽科のパフォーマンス評価は表現領域においてさらに効力を発揮するのではないかと感じた。

今回教材として、教育芸術社の教科書に掲載されているオスカー・ピーターソン作曲「自由への讃歌」を取り上げた。この曲は、JAZZの名曲であり、世界中の多くの人々に愛されてきた。JAZZの魅力は、スイングという独特のリズムと即興性である。即興演奏が許されるということは、音楽の中に一人一人のアイデアや工夫を自由に盛り込むことが可能となる。反面、この自由度の高さは、記述語のルーブリックでゴールの姿を示すことの困難さを意味する。「自由にアドリブを入れる」と記述することは簡単だが、実演は容易でない。記述語によるルーブリックと動画ルーブリックの両方を示していくことで、学習者にとって目指すゴールが明らかになり、評価の学習支援ツールになると考えた。（**表7・8**）



岐阜市立東長良中学校　音楽ワークシート

【学習テーマ】名曲をプレゼンテーションしよう。

くるみ割り人形から「トレパック」

【題材でつけたい力】
・バレエ音楽に含まれる芸術の要素を感知し，様々な芸術的な要素同士が醸し出す雰囲気を感じとることができる。
・バレエ音楽の特徴を音楽の要素と関わらせて感じとり，仲間によさや特徴をプレゼンテーションすることができる。

【 課題 】「プレゼンテーション」の発表をしよう。

1，仲間のプレゼンテーションをうけて応答しよう。到達目標表を使って，プレゼンテーションを評価しよう。

今日の到達目標（ルーブリック）
プレゼンテーションの中に３つ以上の音楽の要素が含まれていた。・・・A
プレゼンテーションの中に２つ音楽の要素が含まれていた。・・・B
プレゼンテーションの中に１つ音楽の要素が含まれていた。・・・C

音楽の要素
・強弱
・速度
・音色
・リズム

班　名	コメント，もう一度見てみたい場面など，（評価した理由も書く）	評価（ABC）
1班	バイオリンとサックスのくみあわせがすごい。人形の動きが曲のイメージとあっていて，ほぼ全部，強弱を上下や左右の動きで表せている。曲がもりあがるところでは人形の動きが大きい。	A
3班	人形がくるくるまわっているところが同じリズムのくりかえしを表して よかった。人形の数がどんどんふえていくところからも強弱をかんじれた。タンバリンが一番大きく強調したいところでたたかれてよかった。おどりっぽくて楽しそうな感じがした。	A
4班	音楽の良さが言葉で表現できている。華やかな所と静かな所の対比 etc… 商品を販売するときに，そのよさを分かりやすく伝えられていたから，買いたいなと思えた。	A
5班	2回目にでてきた図形楽譜が共感できて，なるほど（タンバリンの音）と思えた。プレゼンの文字の様子からも曲のイメージがつかめる。みんながいま出していた意見からの説明がわかりやすい。	A
6班	様々な楽器を用いて演奏している。そのフレーズの音楽にあった楽器を選んで用いていて6班のかんじた音楽のイメージが伝わってよかった。また，最後に花をだげたことで曲のおわりを表現いまして，最後も華やかでおわることが伝わってきた。	A

2，今日の曲の特徴をあらわしたパフォーマンス，図形楽譜，今までの学習を振り返って「トレパック」の批評文を書こう。（もちろん全部埋める　不足したら裏面へ）

トレパックという曲は，長調という明るい音色の曲で私はこの曲をきいて遊園地（メリーゴーランドやコーヒーカップがまわっていて，ふうせんがとんでいる。ピエロが何人もいるおどっている。）をイメージしました。何回も同じフレーズの音がくりかえされる曲で，同じできこえるけど音の強さがだんだん弱く，大きくなっていくのが感じられました。同じフレーズの中でもなめらかなところとはねるような軽いところと様々なリズムがはいっていて，それらのくりかえしによってこの曲しつができていると感じられました。速度が軽いところ→速い　ながれるようになめらかなところ→おそい

図４　パフォーマンスの実際と生徒が記入したワークシート

表７　「リズムを自由に変えてジャズで即興演奏を楽しもう！」パフォーマンス課題

日本の有名なジャズピアニスト○○さんが、長良公園で野外コンサートを行うことが決定しました。○○さんは、プログラムの中でオスカー・ピーターソンの「自由への讃歌」を取り上げることが決定しました。○○さんは、ジャズの特徴である「インプロヴィゼーション」の楽しさを伝えようと、「自由への讃歌」のテーマをもとに即興的な旋律を創作し、当日のコンサートで東長良中学校の生徒と一緒に演奏することを求めています。

表８　「リズムを自由に変えてジャズで即興演奏を楽しもう！」題材指導計画

単元（題材）の指導計画　「リズムを自由に変えてジャズで即興演奏を楽しもう！」 ～オスカー・ピーターソン『自由への讃歌』
第４・５時　音楽表現の創意工夫　音楽表現の技能 ねらい：ジャズの特徴であるインプロヴィゼーションを生かして「自由への讃歌」のテーマをもとに即興的にフェイクして創作した旋律を伴奏に合わせてパフォーマンスし、「リズム」「声の音色」の要素と作品に込めた「思いや意図」を知覚・感受し、互いの演奏を聴き合って批評することができる。 （第５時）本時 前時に完成させたパフォーマンスのリハーサル時間を確保し、最大限のパフォーマンスができるようにする。グループごとにパフォーマンスを発表する。発表の様子は、ＶＴＲに収録し記録として残す。仲間のパフォーマンスを参観し、ルーブリックに基づいての評価とよさや改善点などをワークシートに記入する。パフォーマンスに対しての評価について発言する生徒の様子も録画する。 （第４時） 各グループでパフォーマンス課題に基づき、コンサートで歌う即興で創作した「自由の讃歌」の旋律を考える。指定された項目について、今までの学習を活用してパフォーマンスを考える。この楽曲にとどまらず、今までの音楽経験をパフォーマンスにも取り入れるなど様々な魅力を発信できる工夫をしたい。また、ルーブリックの確認をして目指す指標を把握する。この時間の中に必ず次時に向けたリハーサルの時間を位置付け、最大限のパフォーマンスができるよう配慮する。
第３時　音楽表現の創意工夫 ねらい：「Oliver Jones、Ranee Lee、Montreal Jubilation Gospel Choir」の演奏を参考にして、The Mark Edwards Swing Gospel Jazz Orchestra の演奏を伴奏として、ジャズの要素である「インプロヴィゼーション」を活かして、即興的にメロディーを自由に変化させて、旋律を創作することができる。 ジャズの魅力であるインプロヴィゼーションを活かして、テーマであるメロディーを自由に変化させて、即興的に旋律を創作する。
第２時　音楽への関心・意欲・態度 ねらい：「自由の讃歌」がジャズ、ポップス、コーラスといった多様なジャンルの演奏を聴き取り、オスカー・ピーターソンのオリジナル演奏と比較聴取して、それぞれの演奏のすばらしさを聴き取ることができる。 ジャズ（小曽根真、奥田弦）、ポップス（Ranee Lee）、ポップス＆コーラス（Oliver Jones、Ranee Lee、Montreal Jubilation Gospel Choir）とオスカー・ピーターソンの要素を比較して聴き、その特徴を文章などで発表することができる。また、真似て歌ってみることができる。
第１時　音楽への関心・意欲・態度 ねらい：「自由の讃歌」が多くの人々を魅了してきた楽曲の仕組みを意欲的に探ろうとすることができる。 「自由の讃歌」が人々に愛される要因をジャズの要素（インプロヴィゼーション、コールアンドレスポンス、スイング、シンコペーションなど）を理解した上で音楽の仕組みから分析する。オスカー･ピーターソンが黒人たちの人権を訴える公民権運動の最中、その応援歌としてつくられた背景をもつ曲でもある。オスカー・ピーターソン（晩年）の病気を克服し、再びステージで演奏した映像を視聴して、オスカー・ピーターソンの生き方が映し出されていた演奏を鑑賞する。

6　動画ルーブリックの活用

今回の単元では、まず「B」段階の基準をクリアしている生徒を動画としてサンプル化を試みた。サンプル化をしたのは、男子生徒の２つのグループである。**表10**の基準についてはすべて満たし、パフォーマンスに対する思いや意図をワークシートに書き表して説明することができていた。また、普段の合唱ではなかなか意欲的に歌えない生徒が生き生きと歌う様子も見られたからである。こうした姿は、周りの生徒の意欲を掻き立てると感じた。

この動画ルーブリックに対して、他のグループの生徒たちは、**表９**のように具体的に発言している。

「A」段階の動画ルーブリックとして作成した生徒の実演による動画は**表10**のとおりである。当初示した「B」段階の動画ルーブリックに加え、２通り（「A１」「A２」）の動画ルーブリックを示すことにした。この「A」段階のサンプルのパフォーマンスには、生徒の様々な創意工夫が表出し、パフォーマンスに拡がりが見られるようになっている。打楽器を使用している「A１」と身近な物を利用している「A２」とではずいぶんと相違点が見られ、「A」段階の多様性を示すためには適切であると判断したからである。

これらの動画ルーブリックを示しながら、さらにパフォーマンスの追求を進めた。多くのグループで打楽器が取り入れられたり、独自性を出すために打楽器以外の日常使用するものを利用したりしてパフォーマンスを高める生徒の様相が見られた。

表11の生徒のグループが重点的に工夫をしようとしていた部分は、全音符で伸ばす「free」の部分であった。ルーブリックの記述語にもあった「全音符など伸ばす音で、装飾的なリズムを加えている。」に相当する部分の創意工夫

表９　授業でB段階の動画ルーブリックを示した生徒の反応

C１：	○○くんは、スイングのリズムに乗って生き生きと歌っています。シンコペーションをたくさん使い、伸ばす音も大きく揺らしています。合唱のときよりもよく声が出ている。フィンガースナップもうまくて、フィンガースナップもおおげさにやるとスイングのリズムがよく分かる…。
C２：	私たちは、ここまで思い切りまだできていません。でも、こうして、映像でゴールの姿を見ると具体的にどうやってやればよいか分かりやすいです。堂々と声を出してフィンガースナップも堂々とやってみたいです。

表10　生徒の実演による動画ルーブリックの例

判定	ルーブリック・サンプルの内容
A１	ルーブリックに示したスイングのリズムを感じながらシンコペーションを用いて旋律をフェイクしていることに加え、打楽器（タンバリン、カバサ、カスタネット）を使用し、終止にはハーモニーを加えている。
A２	ルーブリックに示したスイングのリズムを感じながらシンコペーションを用いて旋律をフェイクしていることに加え、教室の２つのごみ箱を棒で叩いて音を鳴らしスイングのリズムを取って、「板を叩く」「画鋲の入った缶を振る」ことで拍子をとっている。
B	フィンガースナップや手拍子を使用し、スイングのリズムを感じながらシンコペーションを用いて旋律をフェイクしている。

をしていた。このグループは、動画ルーブリックに登場した打楽器を用いてパフォーマンスする様子からヒントを得て、全音符の部分を声だけで揺らすのではなく、タンバリンの外側にある金属の音も同時に揺らし、効果を上げようと思考した。つまり、映像による提示によって生徒の創造性を膨らませる効果があったと考えられる。

このように、動画ルーブリックはゴールの姿を示すだけではなく、生徒の創造性を喚起させる役割も担っていることが明らかになってきた。この動画ルーブリックをプロや教師のパフォーマンスではなく、生徒のパフォーマンスとして示す点に意義がある。生徒は、仲間のパフォーマンスの中から質的に高まっている部分に着目している。今回は、打楽器や叩いて音を出せる日常の品に着目し、自分たちのパフォーマンスにどのように取り入れたら質的に高まる演奏になるかを思考していた。仲間の演奏からヒントを得て、自分たちのパフォーマンスを自らつくり変える学びが生まれていた。この学習の様相が生まれる１つの契機として動画ルーブリックが活用されていることが明らかとなり、動画ルーブリックが生徒のパフォーマンスの質的向上につながっているとの確証に至った。

表11　生徒がアセスメントシートに記述した内容

ぼくたちのグループでは、最初伸ばす音を揺らすことをしようと思って「free」の所を３回言うようにして揺らしていたんだけど、ルーブリック・サンプルにあった打楽器を使えば、もっとその部分を強調できるんじゃないかという意見が出て、タンバリンなどの楽器を使うことになりました。この学習では「シンコペーション」や「スイング」をどこでどう使えばよいか考えることができました。

B　動画ルーブリック

Ａ１とＡ２は，レベルの差を示すものではない。パフォーマンスの質の違いを番号で示した。どちらもA段階であることを付記する。

Ａ１　動画ルーブリック

Ａ２　動画ルーブリック

図５　形成的につくりかえ段階ごとに示した動画ルーブリック

7　パフォーマンス評価が生徒にもたらした効果

パフォーマンス課題の解決のために、ゴールの姿を示したルーブリックや動画ルーブリックが大きな効果を発揮していると言える。**表12**の質問項目⑥においては、12月の平均値が3.757と生徒たちは有効性を実感している（**表13**）。つまり、パフォーマンス課題の解決には、高次の学力を必要とするが、ゴールの姿が示された動画ルーブリックがあることで、明確な自分のゴールを思い浮かべ課題解決に向かっていることが分かる。

パフォーマンス評価を取り入れた授業が生徒にもたらしたものは、ルーブリックや動画ルーブリックによって明確にゴールを示すことで、見通しをもって課題解決に向かえるということである。見通しをもって進められることが課題解決の意欲化につながり、自分の思考・判断の課程をパフォーマンスとして創り上げていく楽

表12　パフォーマンス評価にかかわる質問項目（対象：生徒）

No.	質　問　項　目
①	パフォーマンス課題に取り組むことで、普段の課題よりもじっくりと考えることができるようになった。
②	パフォーマンス課題に取り組むことで、仲間と協力しながら課題を解決できる力が身に付いた。
③	パフォーマンス課題に取り組むとき、様々なアイデアを考えたり工夫したりして課題を解決した。
④	リアルな生活の場面を想定したパフォーマンス課題は、普段の課題に比べ自分のアイデアが自由にもりこめるので楽しく取り組むことができた。
⑤	ルーブリック（目指す姿）があることで、目指す姿がはっきりとして取り組みやすくなった。
⑥	動画ルーブリックは、自分たちのパフォーマンスを高めるために有効であった。
⑦	動画ルーブリックの仲間のパフォーマンスを視聴することで、様々なパフォーマンスのアイデアが浮かんできて、自分たちのパフォーマンスを高めた。

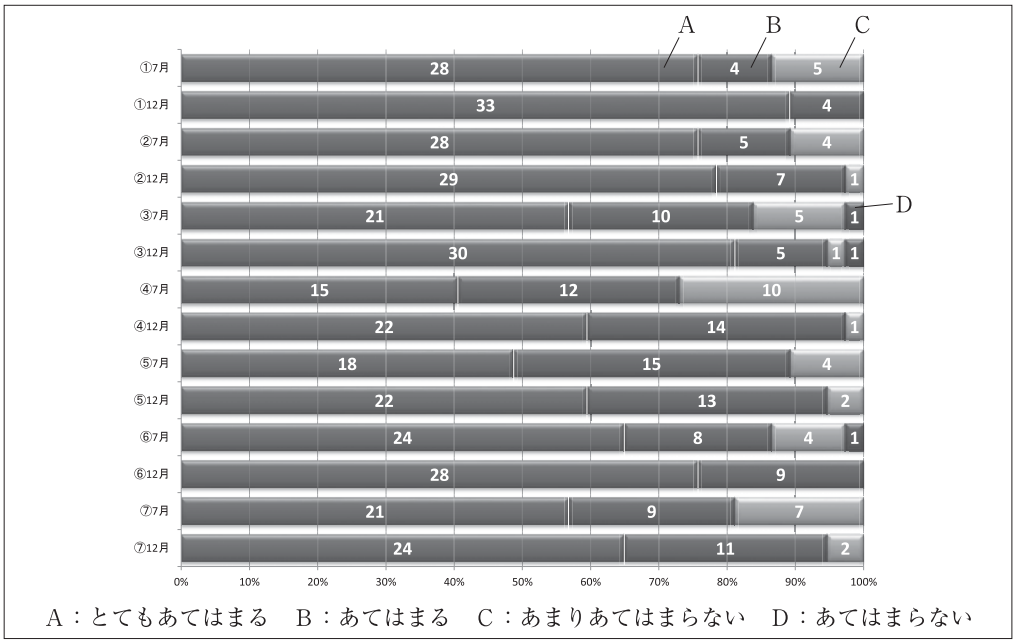


図6　表12の質問項目による調査結果（2013年7月、12月の2回実施）

しさに結び付いていくことが分かってきた。思考力・判断力・表現力といった高次の学力を育成することは、容易なことではなく粘り強さが求められる。今まで、「音楽表現の創意工夫」の授業は、ゴールが曖昧で這い回ることが多いとの指摘が従前よりあった。本研究では、「ゴールをルーブリックや動画ルーブリックによって明確にすれば、生徒は、見通しをもって意欲的に取り組める」という視点をもって進めてきた研究の結論を得ることができたと考える。

音楽科の学力は、「知覚・感受」を基盤とした思考力・判断力・表現力につながる「音楽表現の創意工夫」「鑑賞の能力」を育成することにある。創造性を重視する音楽科にとっては当然とも言える。技能は音楽表現をするための最終的な手段である。こうした質的に高まった学びを技能によって表現していくわけであるから、最終的な手段である技能ばかりを鍛えて上達させても中身のない、言い換えれば音楽科の中核の学力（音楽表現の創意工夫）を育成しないまま無味乾燥な学びになることも考えられる。中学校においては、その典型的な例が「合唱指導」であった。合唱に偏った音楽の授業は、これまでにも批判の対象となってきた。パフォーマンス評価の導入は、こうした課題を克服する新たな可能性をもたらし、21世紀型学力の育成に貢献すると確信している。

表13　図６の結果をもとに２群の母平均の差の検定（対応あり）を実施した分析結果

No.	質問項目	７月		12月		統計量:t	有意差
		平均値	SD	平均値	SD		
①	パフォーマンス課題に取り組むことで、普段の課題よりもじっくりと考えることができるようになった。	3.622	0.721	3.892	0.315	−3.235	*
②	パフォーマンス課題に取り組むことで、仲間と協力しながら課題を解決できる力が身に付いた。	3.649	0.676	3.757	0.495	−1.672	
③	パフォーマンス課題に取り組むとき、様々なアイデアを考えたり工夫したりして課題を解決した。	3.378	0.828	3.730	0.652	−4.416	**
④	リアルな生活の場面を想定したパフォーマンス課題は、普段の課題に比べ自分のアイデアが自由にもりこめるので楽しく取り組むことができた。	3.135	0.822	3.568	0.555	−4.364	**
⑤	ルーブリック（目指す姿）があることで、目指す姿がはっきりとして取り組みやすくなった。	3.378	0.605	3.541	0.681	−2.233	*
⑥	動画ルーブリックは、自分たちのパフォーマンスを高めるために有効であった。	3.486	0.435	3.757	0.804	−2.522	*
⑦	動画ルーブリックの仲間のパフォーマンスを視聴することで、様々なパフォーマンスのアイデアが浮かんできて、自分たちのパフォーマンスを高めた。	3.378	0.599	3.595	0.794	−2.253	*

（$p<0.05$* $p<0.01$**）

〈引用文献〉
1　「社会の変化に対応して求められる資質・能力を育成する教育課程を編成の基本原理」国立教育政策研究所編　2013年、１ページ。
2　奥忍「芸術関連諸教科の統合アプローチの検討－ドイツと台湾の例を参照しながら－」日本音楽教育学会、日本音楽教育学会第43回大会プログラム冊子、2012年、106ページ。
3　国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のために教育（ESD）に関する研究〔中間報告書〕」、2010年11月、４ページ。
4　小山英恵「音楽科における評価の効率化・簡素化－『真正の評価』としてのパフォーマンス評価に着目して－」『指導と評価』Vol.58、日本図書文化協会、2012年５月、29－30ページ。
5　ウィギンズとマクタイによって提唱された。
6　http://www.k12.wa.us/Arts/PerformanceAssessments/default.aspx#Music：ワシントン州公教育管理局HPの Developed Performance Assessments for the Arts を参照。指導案の作成当たっては、西岡加名恵・田中耕治編著「『活用する力』を育てる授業と評価－中学校－パフォーマンス課題とルーブリックの提案」学事出版、2009年、74～85ページを参照した。
上記に加え、次の２つの論文を引用または参考にした。
・岐阜市立東長良中学校：薄田茂樹 教職実践開発専攻：原田信之「中学校音楽科鑑賞領域におけるパフォーマンス評価の導入」岐阜大学教師教育研究（第９号）2013年
・薄田茂樹「音楽科に真正のパフォーマンス評価を導入した授業改善」岐阜大学教師教育研究（第10号）2014年